

生薬の使用頻度から『弁惑論』の特徴を探る

富山医薬大・和漢薬研・資源開発^{a)}、北里研・東洋医学総研・医史学^{b)}

○府和隆子^{a)}、片貝真須美^{a)}、小曾戸洋^{b)}、谿 忠人^{a)}

【目的】我々は歴代医方書の特徴を構成生薬の使用頻度から比較考察している¹⁾。今回は13世紀(元代)の『弁惑論』(『内外傷弁惑論』)をとりあげた。本書は補中益気湯を記載した処方集として現代医療における意味がある。本書の生薬使用頻度を整理し、内傷病治療の用薬法を明らかにするとともに、外寒病治療を述べた『傷寒論』と比較した。

【方法】底本の『弁惑論』は和刻漢籍医書集成第六輯を使用した。処方内容をデータベース化(The Card, Ver.7.7, ASCII)し構成生薬の使用頻度を求めた。薬味薬性、薬能は『湯液本草』『神農本草経』『中華人民共和国薬典2000年版』に従った。

【結果・考察】1. 『弁惑論』の構成：91種類の生薬で46処方が構成され、加減方などを含めると105生薬、108処方が記載されている(他書からの引用が18処方)。108処方の中で丸剤が33方(約31%)を占めており、『傷寒論』の10方(約2%)に比して多い。また『傷寒論』と配剤生薬も同じ共通処方五苓散のみである。

2. 生薬の使用頻度：105種生薬の頻度上位は白朮、炙甘草、人参、升麻、柴胡、橘皮、黄耆、当帰、枳実、沢瀉であった。上位8種は補中益気湯の構成生薬である。『傷寒論』の上位10種は桂枝湯と大承気湯の構成生薬が上位を占めている。

両書に共通する上位生薬は炙甘草と枳実のみである。『弁惑論』では白朮、人参、黄耆などの補気薬の使用頻度が高い。これは『傷寒論』の太陰病に類似するが『弁惑論』では柴胡、升麻という昇陽薬の頻度が高く、附子、乾姜の使用頻度は少ない。

3. 薬味薬性：辛甘薬が約63%で酸苦薬の約1.8倍、温熱薬が約60%で寒涼薬の約1.7倍であった。内傷病は辛甘温熱剤で治すことが実証されている。『傷寒論』では辛甘薬が約56%、温熱薬が約24%である。

4. 補中益気湯の加減方：夏期の熱証には補中益気湯に黄連、黄芩、その他の季節の寒証には豆蔻類(カルダモム類)が加味されるなど30項目にわたって解説されている。

【総括】使用頻度、薬能考証から『弁惑論』は『傷寒論』の太陰病に相当する病期で、内傷病(とくに脾胃の気虚証)を補う補気剤の運用を記載した処方集であることを再確認した。『弁惑論』の特徴を示す生薬は人参、白朮、黄耆、『傷寒論』は桂枝、大黄、附子である。補中益気湯の加減方から虚証の熱証や寒証に対する用薬法も確認できた。

1)谿忠人、赤丸敏行：第49回日本東洋医学会学術総会,1998.5,熊本